

「田園空間博物館構想」と「月農会(官民プラットフォーム)」を組み合わせた官民連携の取組

1. 田園空間博物館構想

田園空間博物館とは

博物館へのアクセス

官民連携の基礎づくり

活動例1 — 灌漑開発 —

活動例2 — コメの品質 —

2. 月農会

田園空間博物館、民間連携との関係

3. 官民連携事例

① (株)ケツト科学研究所

穀物水分計

② (株)トプコン

レーザーを使った均平技術

③ (株)唐沢農機サービス & KiliMOL

中古農機

④ (株)太陽油化 & アセンティア

有機肥料(TOKYO8)

2022年2月10日

エチオピア国農業省 農業政策アドバイザー 浦杉

1. 田園空間博物館構想



日本が初めて乗り出す灌漑稲作と、地域が一丸となって高品質のコメづくりをする重要性を説明する日本国大使(写真中央)。大使の背後に広がる緑の空間が博物館構想の舞台。

田園空間博物館とは

建物の中に展示するものとは異なり、地域全体を博物館として様々な農業技術の発信、農民との活動や交流を推進。

11月(コメ収穫期)



1月(タマネギ作)



写真奥が、農民の直営施工で建設したソーラーポンプ場。これにより、乾季の不毛の大地が一面の緑に変わり、一年を通じ、人々の豊かさと生活の安心を感じさせる景観となった。

田園空間博物館とは

博物館は普及員が経験を積む場として、また、研究員が農民の協力を得て、新たな取組を実践する場としても活用。

農民の伝統的な収穫方法の把握



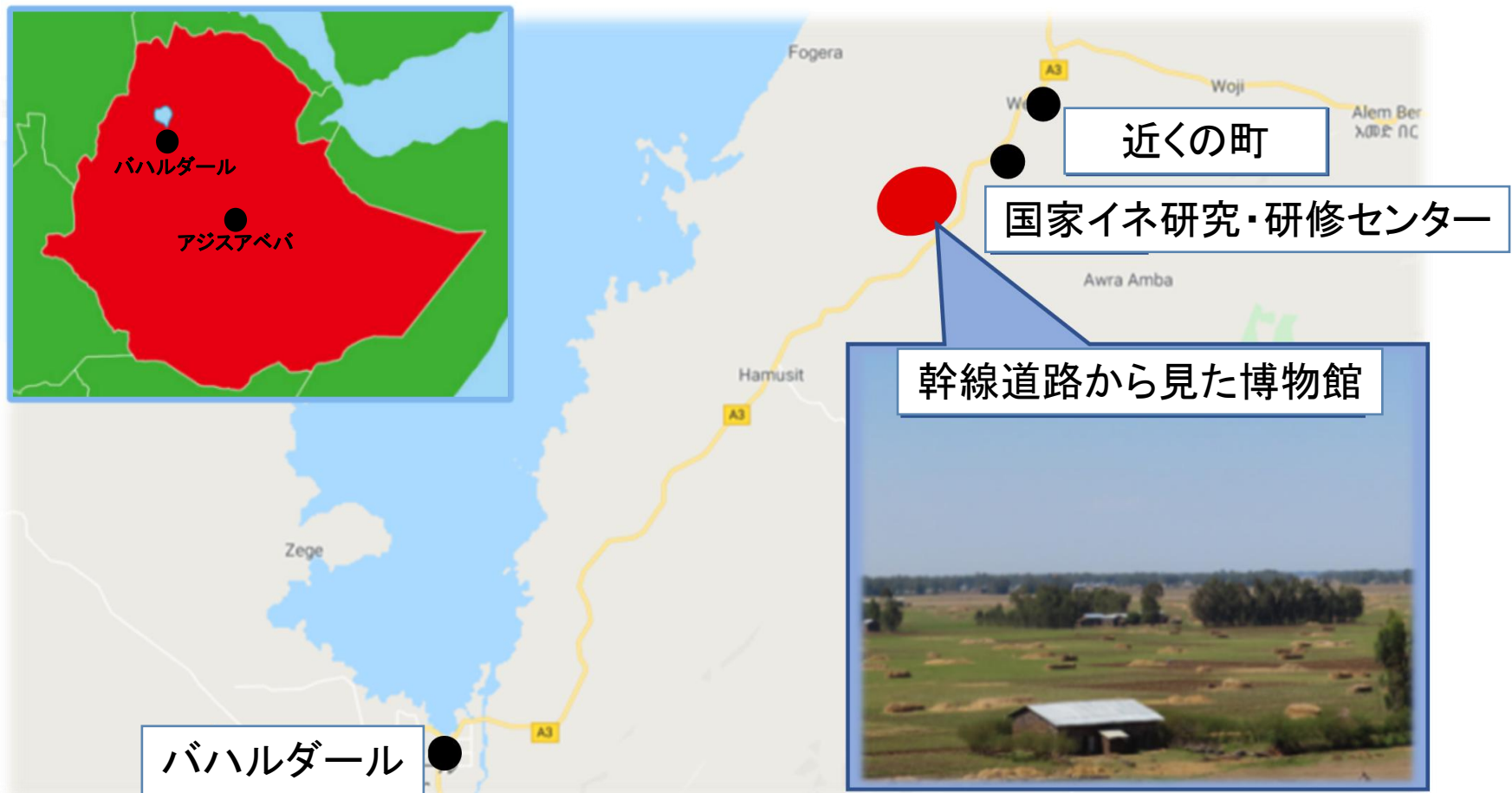
農業機械の実演



普及員、研究者、日本人が、農民と共に活動することで、地域が抱える課題(例えば、作業能率が低い、コメに石やゴミが混入する等)を共有し、新たな取組へとつなげることができる。

博物館へのアクセス

アムハラ州の州都バハルダールより、幹線道路で50分(55 km)、JICA稲作プロジェクト(エチオリス2)の拠点である国家イネ研究・研修センターより5分、近くの町まで10分でアクセスは良好。



官民連携の基礎づくり 活動例1 ― 灌漑開発 ―

農民主導のソーラーポンプ灌漑事業を通じて、地方政府職員のサポート体制と農民の組織力の強化を図ってきたところ。



地方職員と、ポンプ場の設計、農民組織（水利組合）の規約案の作成



工事における農民の負担（労務及び一部材料）の合意、水利組合設立の合意

官民連携の基礎づくり 活動例1 ― 灌漑開発 ―



人力での井戸掘り



コンクリート練り

官民連携の基礎づくり 活動例1 ― 灌漑開発 ―



施工管理・指導、操作方法の確認の他、水利費の徴収、設置後のモニタリングも実施



ソーラーポンプで汲み上げた水はホースを使って各ほ場に配分

官民連携の基礎づくり 活動例2 ― コメの品質 ―

農民が生産したコメの一部は、直接、アジスアベバに運び、農業省、大使館、JICA事務所を含む関係者が実食し評価。



エチオピアのフォゲラ米を食べてみませんか
ー 希望される方にお配りします ー

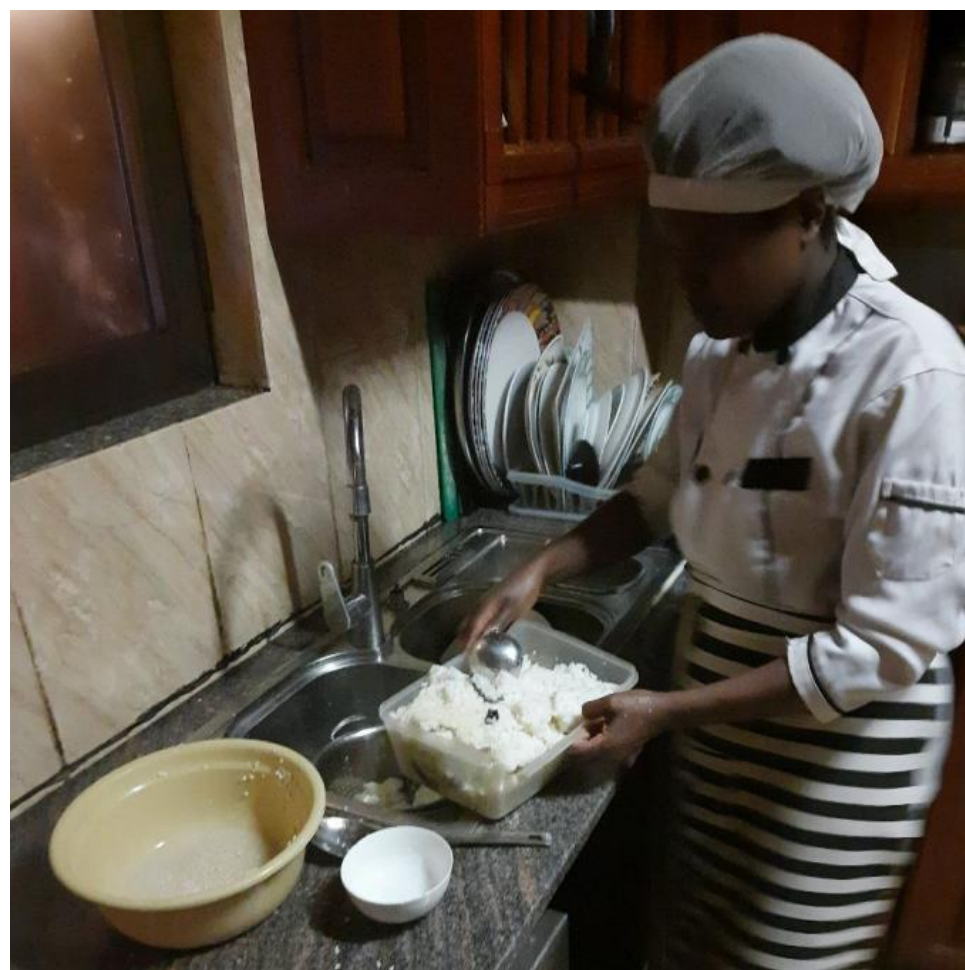
今から約五十年前の一九七〇年代に始まったとされるエチオピアの稲作。その中でもタナ湖沿岸のフォゲラ平原は、国内有数の米どころとなっております。しかし、輸入米に比べ品質が劣ることもあり、市場では輸入米に押されています。

このため、私たちはここフォゲラで高品質の米づくりに挑戦しています。お米を最高の状態で食べていただき、エチオピアの食の未来を切り開きます。



左は日本人向けチラシ。日本料理レストランやエチオピアレストランも協力。今年産のコメは、石や雑物の混入も見られ、味もまだまだであるが、次年産への教訓として改善する。

官民連携の基礎づくり 活動例2 ― コメの品質 ―



日本米に比べてモチモチ感を出すアミロペクチンの割合が低く、違う品種の導入も検討する。



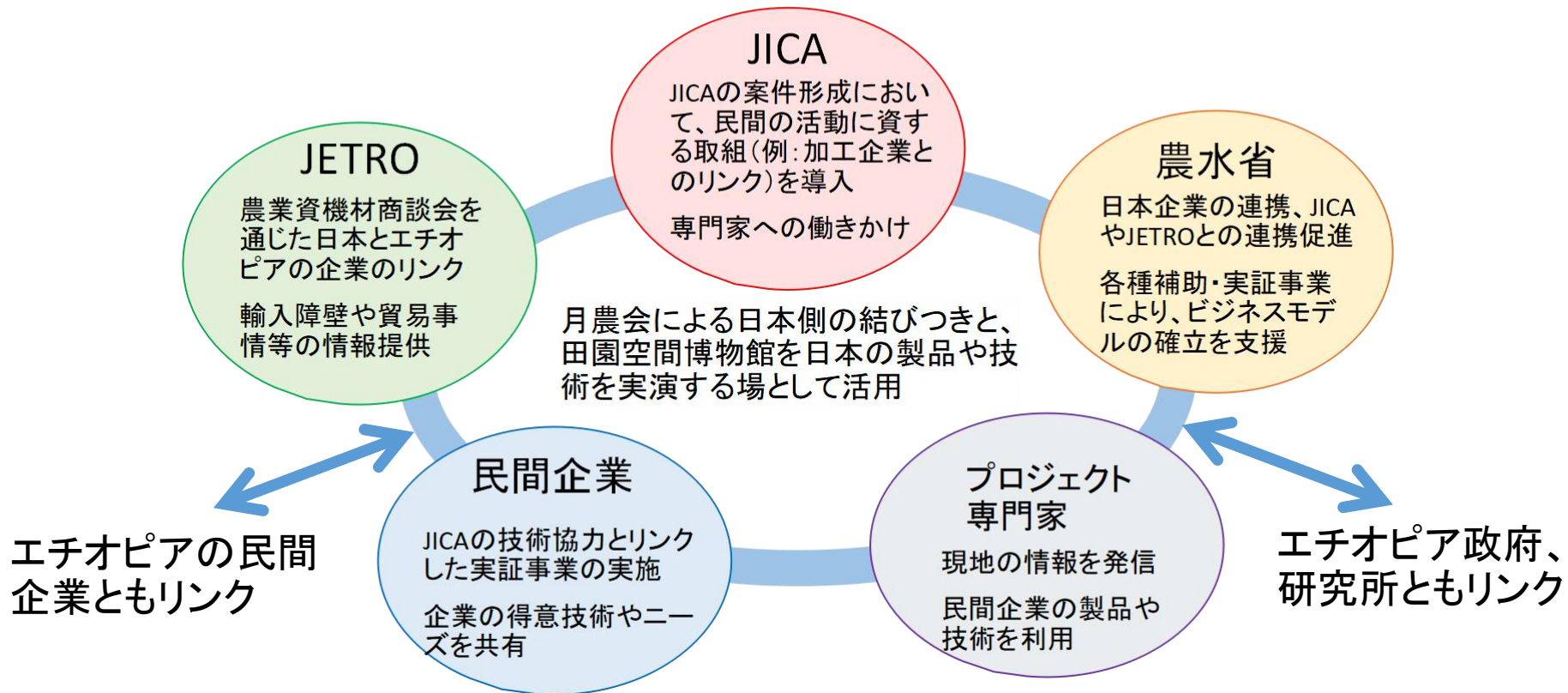
シナモンを使い香りをプラスするなど、美味しく食べるためのレシピも研究。将来は、博物館で収穫したコメが「ジャパン」ブランドで高い価格で都市に流通することを目指す。

2. 月農会 田園空間博物館、民間連携との関係

月1で農業関係者が集まって情報共有・交換をする場（現在はWeb会議）を農業政策アドバイザーが運営している。関係者は、JICAプロジェクト、大使館、JETRO、民間企業など。

＜過去の月農会実施例＞

- ・エチオピアで民間企業が事業展開する上での留意点（JICA事務所（民間連携））
- ・ジェトロの役割と農業セクターの貿易を巡る状況（JETRO事務所）
- ・COVID-19影響下のフードバリューチェーン現状把握調査（デロイトトーマツ）



3. 官民連携事例 ① (株)ケツト科学研究所 穀物水分計

割れ米を減らし、2割を越えるとも言われる収穫後ロスを最小化するため、水分量にも着目した研修を検討。



左が携帯用、右が卓上用



計測方法の実演



エチオピア農業省の穀物局、農業機械化局、研究所の職員・研究員その他、エチオピアの民間企業（Green Agro Solution社）等がWebで参加し、今後の活用について議論。

3. 官民連携事例 ② (株)トプコン レーザーを使った均平技術

コメの収量が安定しない一番の要因であるにもかかわらず人力では対応できない「ほ場の均平」に対応。



国立イネ研究・研修センターのほ場の様子、均平が悪く、水があるところの収量(平均9.3 t/ha)に対し、水がないところでは収量が40%(平均3.7 t/ha)まで減少。



(株)トプコンは、既にエチオピアのディーラーと提携。エチオピア側からは、「エチオピアは新たなことに取り組むのを避けたがるが、実演から始めよう」との意見。

3. 官民連携事例 ③ (株)唐沢農機サービス & KiliMOL 中古農機

農機具業とインターネット市場をリンクさせ、輸出・輸送、税関等に関するノウハウも活かし、エチオピアを目指す。



店に並ぶバインダ。基盤条件が良くないエチオピアでは、普及候補となるが、メーカーが違くと部品や故障箇所が異なり、メンテ補修が難しいため、同一機種で揃えたいとのこと。



ケニアに輸出された田植機と同じ機種について、JICA専門家との意見交換。ケニアでの経験を基に、エチオピアの田園空間博物館での実演を視野に入れている。

3. 官民連携事例 ④ (株)太陽油化 & アセンティア 有機肥料(TOKYO8)

化学肥料を全量海外に依存するエチオピアで、フランチャイズ方式で低コスト液肥を提供するビジネスモデルで挑戦。

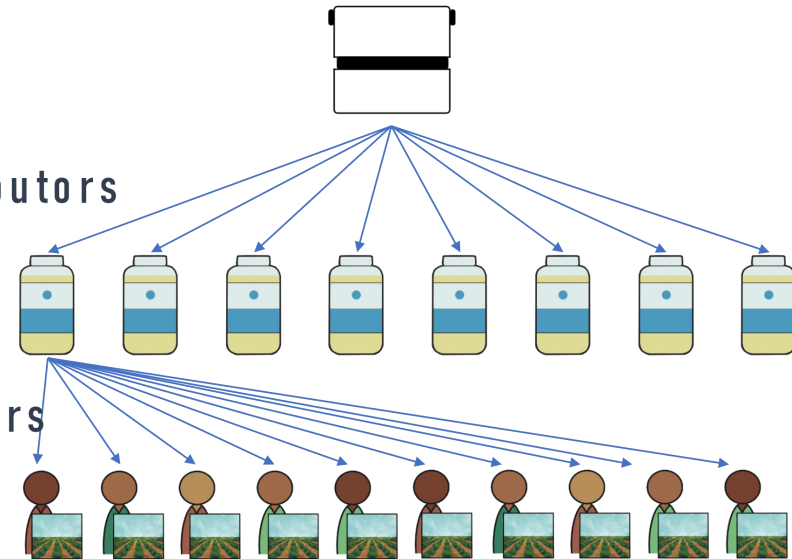


TOKYO8の製造プラントでは、棚が3段に分かれ、下段が原液製造用。中段が増殖用で、それぞれ四つのタンクを連結させている。上段はTOKYO8の貯蔵タンク。

Unit Owner

Distributors

Farmers



仮に博物館の水利組合がフランチャイズ契約をすると、組合員にサービスとして低価格、もしくは無料で提供することで、コメなどの大量集荷等につながる可能性。